

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530778

研究課題名（和文） 言語活動を重視した学習者中心の美術教育に関する研究

研究課題名（英文） Language Activities in Learner-Centered Art Education

研究代表者

直江 俊雄 (NAOE TOSHIO)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授

研究者番号：10272212

研究成果の概要（和文）：美術に関する学習の深化・共有・定着をはかる上で、言葉による思考を促し、文章表現の過程を積極的に用いるアートライティング教育研究の枠組みを提示し、実際の教育における支援プログラムを計画・遂行・評価した。グループ討論による美術学習のための指導者養成プログラムを高等教育に導入し、その効果を検証した。これらの研究を通して、言語活動を重視した学習者中心の美術教育を、教育現場に位置づけていくための基礎とした。

研究成果の概要（英文）：This study formed a basis for introducing language activities in learner-centered art education into classrooms. A framework of studies on Art Writing Education, which utilizes a writing process for fostering thinking in language for the advancement, sharing, and retention of what one learned in art, was proposed. Programs for promoting art writing education were conducted and evaluated. Training programs for facilitators of group discussion in learning art were introduced and the result examined.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：芸術教育

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育（図画工作・美術工芸）、美術教育

1. 研究開始当初の背景

(1) アートライティング教育は、応募者が平成17-18年度科学研究費補助金（萌芽研究）の成果から提唱したものであり、自己の作品制作、他者の作品批評、芸術活動への参加な

どの体験を文章に執筆し、言葉による事実と解釈の振り返りを通して、芸術学習体験をその後の人生において継続した力となるよう内面化していくことを支援するものである。これまでに、高等学校における教育の現状調

査、我が国初の高校生のための美術小論文のコンテストの企画・運営、アートライティング教育研究会の開催、大学美術作品コレクションを活用した言語活動促進のためのアートゲーム開発等の活動を通して研究と啓発普及をはかってきた。こうした萌芽期の成果を基礎に、より体系的な学習方法と教育者研修プログラムの開発が求められる段階に至っている。

(2) 「ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー」は、認知心理学的手法による美的能力の発達段階の統計的分類に基づき、とくに学校・美術館における鑑賞者の大多数を占める第1から第3段階の学習者の認知特性に即した、討論による学習支援方法の体系化を目指したものである。米国等の博物館教育・学校教育・教員研修等では、学習者中心主義の美術学習支援方法として一定の成果を収めており、指導困難校をはじめとする公立学校における児童生徒のリテラシー教育や自尊心の育成への効果、医学教育における患者尊重の態度養成への効果に着目した取り組みも始まっている。最近の研究では学校・博物館の連携により、学習者の文章表現力向上への効果が検討されており、アートライティング教育との直接の接点を見いだすことができる。同ストラテジーは我が国においても、鑑賞教育への関心の高まりから、1990年代より関連する情報などが紹介されているが、多くは文献による情報に基づくものであり、直接米国での調査に基づいた研究は未開拓である。

2. 研究の目的

(1) 言語活動を重視した学習者中心の美術教育という観点から、アートライティング教育研究の枠組みを提示し、実際の教育における支援プログラムを計画・遂行・評価する。

(2) ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーを我が国の言語・文化環境において実験的に導入し、言語活動を重視した学習者中心の美術教育の指導者養成プログラムを確立する。

3. 研究の方法

(1) アートライティングの全国コンテストを企画実施した成果から、応募作品、ならびに応募者に関する資料を収集・分析する。とくに、従来に無い取り組みである高等学校生によるアートのエッセイ作品について、制作体験、作品探究、芸術支援のそれぞれの分野において、実際にどのような取り組みがなされ、どの程度の達成度が可能かを明らかにする。また、各応募者が執筆過程で経験したアート

ライティングに対する困難や達成感等に関する質問紙調査を実施し、学習者側の認識や効果、指導上の留意点等を明らかにする。

(2) 高等教育におけるアートライティングの学習プログラムを開発する。とくに、高校生対象のアートライティングコンテスト応募作品の選考に携わる中でアートライティングの評価に関する基礎的な能力を養い、また学生相互による取材訓練とライティング過程の相互評価による効果に着目し、ジャーナルの編集・刊行までを含めた全体的プロセスをもったプログラムの実現を目指す。

(3) 米国におけるヴィジュアル・シンキング・ストラテジー研究会に参加し、その成果を我が国の高等教育における指導者養成プログラムに反映させ、その導入の効果を探る。とくに、英語で開発された指導法の言語に忠実な理解を基礎に、日本語と我が国の教育環境の中で、その効果をより適切に引き出す指導法の実際と、指導者養成課程におけるコーチングの技術について課題とする。

4. 研究成果

(1) 美術の学習における文章表現の役割に焦点を当てるアートライティング教育を提唱し、今後の研究発展の基礎となる、研究アプローチと適用形態についての枠組みを提示した。また、後期中等教育のアートライティング振興を目指すエッセイコンテスト（高校生アートライター大賞）の基本設計について、学校教育の実態と今後の美術領域の社会的展開とともに視野に入れ、制作体験、作品探究、芸術支援という三種のジャンルを基礎とする観点を論じた。さらに、コンテストの創設と実施を通して、高校生が実際にアートエッセイの執筆において一定以上の成果に到達できることを実証し、教育現場で生徒と教師の活発な取り組みを生み出しつつあることを明らかにした。

(2) アートエッセイコンテストにあわせて実施した応募者への調査結果から、美術の学習における文章執筆の活用を重視するアートライティング教育への取り組みが、学習者によってどのように認識されているかを調べた（第1回調査・2005年4月-10月、回答者171名、第2回調査・2007年4-10月、回答者213名）。その結果、学習者は執筆の過程において、表現する内容の構想よりも、言葉での表現や伝達に困難を認める傾向が見られた（表1）。また執筆を通して、自己認識や、アートへの認識の深化を経験したことを評価する例が広く認められた（表2）。

表1 第2回応募者自由記述「困難」回答分類

	件数	%*	%**
内容 (テーマ決定)	10	4.7	8.1
内容 (記憶)	5	2.3	4.0
内容 (調査)	3	1.4	2.4
内容 (考察)	5	2.3	4.0
内容 計	23	10.8	18.5
文章表現 (絞り込み)	3	1.4	2.4
文章表現 (構成)	5	2.3	4.0
文章表現 (表現)	27	12.7	21.8
文章表現 (伝達)	24	11.3	19.4
文章表現 計	59	27.7	47.6
経験不足	8	3.8	6.5
苦手	14	6.6	11.3
字数	13	6.1	10.5
その他	7	3.3	5.6
無記入	89	41.8	
計	213	100	100

* 全回答者数に対する%

** 無記入を除く回答者数に対する%

表2 第2回応募者自由記述「成果」回答分類

分類	件数	%*	%**
アートへの認識の深化	35	16.4	29.9
自己認識	42	19.7	35.9
経験の振り返り	11	5.2	9.4
楽しさ	9	4.2	7.7
ライティング体験	9	4.2	7.7
成長	5	2.3	4.3
その他	6	2.8	5.1
無記入	96	45.1	
計	213	100	100

* 全回答者数に対する%

** 無記入を除く回答者数に対する%

(3) 高等教育におけるアトライティング学習の研究として、学生相互の取材活動・相互批評と美術批評学習を起点にした執筆指

導法の開発に取り組み、成果を冊子 *Art Writing* 第3号、第4号として刊行した。

(4) ビジュアル・シンキング・ストラテジーに基づいた学習支援活動「筑波大学子どもアートラウンジ」を継続的に開催し、小学生のグループ討論による美術学習の過程を記録し、映像と発言内容の文字記述による研究資料として整理するとともに、その一部を英語翻訳し、海外研究者と意見交換した。課題とされていた言語の相違による影響は、実際の指導過程では大きな障害ではないことが明らかになった。

(5) 学士課程および大学院博士前期課程のカリキュラムにおいて、ビジュアル・シンキング・ストラテジーによる美術学習指導者のための訓練プログラムを導入した。米国における同プログラム研究会で修得・収集したコーチング技術に加え、パラフレーズ技能に特化した訓練方法や、トークセッションのビデオ解析による学習者の行動理解と指導技術の向上、大学美術コレクションを用いた学習活動の支援参加等、新たに導入した試みの効果を検証中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 直江俊雄、アトライティング教育の波及と課題 — 後期中等教育におけるエッセイコンテスト参加者の動向、美術教育学、査読有、2010年、pp.251-264.

② 直江俊雄、後期中等教育におけるアトライティング — エッセイコンテストの創設による運動展開、美術教育学、査読有、2009年、pp.253-264.

③ Toshio Naoe, The role of cooperative learning in the introductory stages of art teacher training programmes in Japan, *International Journal of Education thorough Art*, 査読有, Volume 4 Number 2, 2008, pp.163-176.

[学会発表] (計5件)

① Toshio Naoe, Cooperative Learning in Art Teacher Training, Centre for International Research on Creativity and Learning in Education, 2009年12月15日, Roehampton University, UK.

② Toshio Naoe, Art Writing Education: Bringing Art into Students' Lives,

International Society for Education
through Art, 2008年8月8日, International
House Osaka

③ 直江俊雄、言語活動を引き出す造形活動
の実践：アトライティング、美術科教育学
会東地区会、2008年6月28日、東京家政大
学

④ 直江俊雄、アトライティング教育の可
能性を求めて、美術科教育学会、2008年3
月29日、群馬大学

⑤ Toshio Naoe, Learning by Writing about
Artistic Experiences, International
Society for Education through Art, 2007
年8月23日, 韓国 ソウル大学

[その他]

ホームページ等

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~naoe/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

直江 俊雄 (NAOE TOSHIO)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准
教授

研究者番号：10272212

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：